水原寅蔵店舗(札幌・明治10年) にみる舶載建築洋書の影響

THE INFLUENCE OF ARCHITECTURAL PATTERN BOOKS FROM OVERSEAS UPON SUIBARA TORAZO SHOP BUILT IN 1877 IN SAPPORO

池上重康 — *1

キーワード：
開拓使，パターンブック，建築洋書，明治初期，洋風建築，擬洋風建築

Keywords：
Kaitakushi (Hokkaido Colonization Office), Pattern Book, Foreign Architectural Book, Early Meiji Era, Western-Style Architecture, Pseudo-Western-Style Architecture

Shigeyasu IKEGAMI — *1

SUIBARA Torazo shop, built in 1877, has been known as the first 'Western-Style' civil architecture in Sapporo. Akihisa ENDO tried to examine this building from an old photograph and historical materials owned by the Archives of Hokkaido. I newly discovered the general plans of this building at the Archives of Hokkaido and Northern Studies Collection of Hokkaido University Library. I could find the similarity of details between this building and the buildings built by Kaitakushi or the plates of pattern books published in USA in the 19th century former owned by Kaitakushi, i.e. this building must be designed by the staves, such as Yoshiyuki ADACHI, the chief engineer, of Engineering Department of Kaitakushi. The 'Western-Style' architecture, composed of referring pattern books, differs from the 'Pseudo-Western-Style' architecture, built by Japanese carpenters who imitate the superficial 'Western-Style' architecture.

1. はじめに

水原寅蔵店舗は、1876年9月の開拓使の家屋改良の告諭を受けて建設された、札幌における民間洋風建築の嚆矢として知られ、1877年10月には、開拓使により賞状が授与されている。

先に、遠藤明久は「水原寅蔵の洋風住宅(明治10年)」¹⁾において、水原家所蔵の写真(図1)ならびに、北海道立文書館(以下、道立文書館)所蔵の開拓使関連簿書から、この建築の実像の究明を試みている。越野武も『北海道における初期洋風建築の研究』²⁾の中で、銅版画に描かれた絵図(図2)から細部意匠を読み取っているが、遠藤の考察の域を越えていない。

ところで筆者は、これまでに開拓使購入の建築関連洋書について、その移管経緯³⁾と、実際の設計にあたっての参照の様子⁴⁾を考察してきたが、その史料収集の際、偶々、当該建築の図面一式(図3

～7)を道立文書館所蔵の開拓使簿書中、および北海道大学附属図書館北方資料室(以下、北大北方資料室)所蔵資料中に発見した。民間による建築であるため、開拓使の営繕事業の一つとしての考察を行わずにいたが、細部意匠に開拓使札幌本庁における営繕事業や同使旧蔵建築洋書との関連が明らかに認められるので、ここに報告することにした。

2. 遠藤明久による水原寅蔵店舗についての考察

遠藤は前掲の報告中で、図1に示した写真と、1877年8月4日付けの「西洋形建家壹棟六拾三坪一合一勺五才並二石庫壹棟建坪拾五坪共入費調書」⁵⁾(以下、「入費調書」)に記載の内容を比較しながら、主棟の正面と左側面、ならびに石蔵の外観意匠と、主棟の内部の様子について、特にガラスの使用に着目して考察を加えている。

図1 水原寅蔵店舗(現在所在不明:北海道大学建築史・意匠学研究室所蔵の複写写真を転載)

図2 高崎龍太郎編『札幌繁栄図録』(1887年)掲載の水原寅蔵店舗

*1 北海道大学大学院工学研究科 助教・工修
(〒060-8628 札幌市北区北13条西8丁目)

*1 Research Assoc., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., M. Eng.

遠藤による考察は要約すると以下になる。

主棟1階外部：正面中央の玄関は1間幅で、両開きのガラス扉を建て込み、左右は腰までパネルとし、ガラス窓建具を4枚ずつ入れる。ガラス窓には重ねが見えないため、嵌め殺しか一本引き、あるいは戸袋が見当たらないので折り畳み戸の可能性もある。

主棟2階外部：屋根大棟の上に載るのは洋風デザインの天水桶である。玄関屋根に施された妻飾りと破風板は、すぐれたデザインである。ベランダを三分する2本の柱は通し柱ではなく、この柱上部から欄間にかけての装飾は開拓使建築には類例を見ない。2階前面に建て込まれたガラス窓建具は手摺子・柱の背後に一本引きで建て込んでいる。屋根妻面に見えるリングと直線を階段状に繋ぐ意匠は開拓使札幌女学校教師館（1875年）のそれと同じである。

主棟の内部：背面には縁側があり、外部開口部は縁側を含め全てガラス建具であろう。「入費調書」の畳82枚、襖40枚の記述と延坪との比較から、室内は日本座敷で構成されていた。

設計者：妻面の破風飾りの意匠が共通する札幌女学校の工事を水原が請負っていた関連もあるが、水原またはその配下棟梁の能力でまとめ得たものとは解し難く、開拓使工業局営繕課技術者、中でも札幌女学校の設計図に捺印を認められる安達喜幸自身、またはその指導による設計の可能性が高い。

3. 新規発見の図面資料

今回、水原寅蔵店舗の設計図と推察される図面を、道立文書館において4枚、北大北方資料室において1枚発見した。

道立文書館所蔵図面は、主棟と石蔵の正面図（図3）、主棟の右側面図（図4）、石蔵の正面と側面を並列して描いた立面図（図6）、そして主棟と石蔵の2階平面図を貼り込んだ配置図（図7）である。北大北方資料室所蔵の図面（図5）は、主棟正面図の描き損じのもので、2階の外壁部分に縦羽目を表現したと思われる線が描き込まれている。図面右端の切断部分が図3の継ぎ足し部分に一致するので、当初は、この図5と図3の石蔵部分が1枚の紙で描かれ、仕様の変更あるいは描き損じにより、主棟部分だけを切り取り、新たに継ぎ足した紙に主棟部分を描いたのであろう。なお、図5の図面は、開拓使関連の他の図面と同封されていた。

ここに示した建築図面と、図1に示した写真とを比較すると、明らかに違いが認められるので、まず、相違点を指摘しておきたい。

正面入口の玄関屋根の意匠が全く異なっている。2階全面に見られるガラス窓建具はなく、代わりにその奥にある櫛形アーチの窓を確認できる。屋根大棟上の天水桶は描かれていない。この3点を除けば、ガラス欄間の棧の割り付けや、2階ベランダの手摺子の形状が若干異なる程度で、ほぼこの設計図の通りに建築されたといえる。

側面図は、正面図に比べると図面としての繊細さに欠け、屋根大棟上の棟飾りの形状と大きさが正面図と異なっていたり、軒高や、1階の底高さなど正面図との齟齬が多い。

次いで、遠藤の考察を検証していきたい。

1階のガラス窓建具は正面図の表記から明らかに引き違いである。2階のガラス建具については図面に記載がないため詳細は不明のままである。配置図を見ると、主棟背面には縁側はなく、背後に延び

図3 水原寅蔵店舗正面図（北海道立文書館所蔵）

図4 「西洋形建家妻之図」（北海道立文書館所蔵）

図5 水原寅蔵店舗正面図描き損じ
（北海道大学附属図書館北方資料室所蔵）

図6 「石蔵 二拾分宅之図」（北海道立文書館所蔵）

る附属屋に坪庭を設け、そこへ縁側を配している。また、裏面には塀で囲んだ庭を設け、そこへは雁行型の縁側を設ける。背後の附属屋の存在を知らなかった遠藤は、主棟の背面に縁側があったと取り違えたのであろう。なお、配置図には床仕上げや建具の表記もあり、諸室は全て畳敷き、建具も殆どが襖であることがわかる。図4の右側に僅かに描かれる附属屋の立面図を見ると、雨戸はガラス入で、さらに欄間にもガラスを入れている。遠藤が「すべてガラス建具であろう」と間違えたのは、この特異な仕様故、致し方ないことである。

4. 開拓使の洋風建築ならびに開拓使旧蔵建築洋書との比較

遠藤が指摘したように、主棟の屋根妻面の破風装飾は、開拓使札幌女学校教師館からの引用である。さらに遡れば、開拓使本庁分局庁舎(1873年)にその嚆矢があり、これは、開拓使旧蔵建築洋書である Woodward, *National architect.*⁶⁾ 掲載の図版(図8a, b)をそっくりそのまま模写したものであった⁷⁾。以下、各部位毎に、開拓使の洋風建築の細部意匠からの引用、および開拓使旧蔵建築洋書掲載図版との類似を指摘していきたい。

図7 「渡島通三拾五番地 西洋形建家并石庫地絵図」(北海道立文書館所蔵)

上：全体配置図
左：主棟1階平面図(部分)

2階窓に共通してみられる楕形アーチを上部に頂いた額縁は開拓使本庁庁舎(1873年)の1階窓と同じであり、石蔵の窓に見られる半円筒型のキーストンを配した半円アーチ窓額縁もまた、開拓使本庁庁舎の2階窓額縁とデザインを同一にする⁸⁾。

側面図の左脇に配置される脇玄関の扉建具は、プロポーションは異なるものの、上部に櫛掛け状のパネル“X” braced panel をつけ、Woodward の図版(図8a)の正面出入口の建具意匠を引用したといえる。起り屋根の上に乗る棟飾り finial は、大主典邸・少主典邸(1874年)の屋根大棟に乗るものと同じであり、そのデザインルーツは Hussey, *National cottage architecture.*⁹⁾ の掲載図版(図9)に確認される。形状の似た楕形アーチの上に乗っている点も興味深い。玄関屋根の棟飾りは開拓使工業局庁舎(1877年)のそれに類似する。この棟飾りもまた、デザインルーツは米国出版のパターンブックにあるものである。また、正面図の主棟大棟上に描かれる矛状の棟飾りは Cummings & Miller, *Architecture.*¹⁰⁾ の図版(図10)に一致する。

遠藤が「開拓使建築には類例を見ない意匠」と評した主棟2階ペランダの支柱上部の装飾も、ほぼ同じデザインを Woodward 前掲書に見ることができる(図11)。図面には描かれていないが、写真(図1)に確認できる屋根大棟上の洋風の天水桶は、そのフォルムだけを Woodward のデザイン(図8a)の煙突に求めたと見ることもできるのではないだろうか。

5. 旅籠屋加藤直吉による「西洋造家作」建築費貸与願

水原寅蔵店舗が建てられた翌年、1町隔てた同じ通り沿いで旅籠屋を営んでいた加藤直吉が、開拓使高官、官員ならびに外国人の宿泊時に不手際のないよう、「西洋造家作」の建築を計画し、開拓使へ月賦払いによる官費の貸与を希望した¹¹⁾。

奉願候書附

私儀

去ル明治四年ヨリ御当所へ加籍仕旅籠屋渡世ヲ以営業届有候然ニ官員様并外国人御止宿相成候都度不体裁ノ義モ有之且ハ御趣意ニ基キ渡島

図8a Design No. 15. 'Front Elevation.' (Woodward, *National architect.*)

図8b Ditto. 'Details.' (Ditto, Ditto.)

図9 Plate No. 62 'Dormer finish.' (Hussey, *National cottage architecture.*)

図10 Plate 29 'G.' (Cummings & Miller, *Architecture.*)

図11 Plate No. 88 (Woodward, Ditto.)

通廿壹番地私有地ノ内へ西洋形家作取設度兼テ志願ノ処何分建築資自
力ニ行届兼罷有候処今般御当所爾志通へ西洋形御家作御取設ニ相成届
ノ有之月賦上納ヲ以御払下ケ被仰付候様昨十年十一月御布達ニ付難有
御趣意ヲ奉戴仕候就テハ年来ノ志願ニモ有之且ハ高官々官員様并外国
人何時御止宿相成候テモ御指差無之様營業仕度ニ付今般爾志通へ御設
ケノ家作月賦上納ノ振合ヲ以別紙絵願願ノ家作官費ヲ以御建築ニ相成
候様奉願上候就テ者上納金皆納迄ハ新築ノ家作ハ勿論私有地并在来ノ
家作共為抵当ト奉差上置候間何卒特別ノ御御詮議志願ノ通御聞届被成
下度別紙絵願相度此段奉願候也

明治十一年三月六日

渡島通廿壹番地平民
職人 加藤直吉
全廿四番地平民
保証人 小田部三郎兵衛

これを受けた同年3月14日付けの文書によると「願之趣難聞届事」として、この嘆願は却下されたが、文中の記述にあるように、この簿書には絵図面が添付されている。正面を描いた立面図と、「横向雛形」と題された矩計図(図12)、ならびに単線で描かれた配置図(図13)である。2階部分をオーバーハングさせるなど独自の工夫もあるが、基本的には、水原寅蔵店舗や他の開拓使による洋風建築を「見よう見真似」で写し取ったともとれる2階軒下のガラス欄間、2階ベランダの轆轤引きの手摺子、1階の上げ下げ窓が入るであろう縦長の窓額縁、見付の細い下見板張りなど、いわゆる「擬洋風建築」に特徴的な、洗練されない雛形¹²⁾をみることができる。1

図12 加藤直吉による「西洋造家作」正面図・「横向雛形」(北海道立文書館所蔵)

図13 加藤直吉による「西洋造家作」配置図(北海道立文書館所蔵)

階の底の持ち送りに至っては、明らかに和風意匠である雲形の肘木を入れる。配置図は、単線で描かれたと表現したが、どちらかと言えば、木割図に近いものでもある。西洋建築の素養のない大工棟梁が、「見よう見真似」の「擬洋風建築」を造ろうとした時には、このような図面が描かれるのであろう。前掲の水原寅蔵店舗の一連の図面と比較すると、あからさまな違いが見て取れる。

6. むすび

前報¹³⁾において、開拓使工業局庁舎(1877年)を対象に、米国出版のパターンブック掲載の図版を組み合わせて一つの建築を構成できたことを考察した。本稿で考察した水原寅蔵店舗の建築は、そのまさに同じ年に設計、竣工しており、ここでもまた、パターンブックの図版を組み合わせて一つの建築を構成したことが確認された。

旅籠屋加藤直吉の「西洋造家作」の図面とは全く異なり、端正なプロポーションの「洋風建築」¹⁴⁾である水原寅蔵店舗は、誰によって設計されたのか。遠藤が考察したように、開拓使工業局営繕課の建築技術者、中でも安達喜幸が取り纏めたと考えるのが、妥当な見解であろう。しかし、付け加えるなら、そこにあった米国出版のパターンブックの存在を忘れてはいけない。水原寅蔵店舗には、他の開拓使建築には見られない、この建築にのみ用いられたパターンブック掲載の意匠——軒下の繊細な装飾——を見ることができる。このことは、パターンブックの存在を知り、かつ閲覧できる人間が設計したことを物語る。即ち、パターンブックの所蔵元である開拓使工業局の営繕技術者が設計をしたことの証でもある。

開拓使工業局では、正しいプロポーションを常に示してくれるパターンブックを日常的に参考にし、設計活動にあたる状況にいた。だからこそ、安達をはじめとする彼ら営繕技術者達は、他の都市に類を見ない端正な「洋風建築」を創出することができたのである。

注

- 1) 遠藤明久「水原寅蔵の洋風住宅(明治10年)」日本建築学会北海道支部研究報告集 No.43、1975年3月、pp.247-250。
- 2) 越野武『北海道における初期洋風建築の研究』(北海道大学図書刊行会、1993年)
- 3) 拙稿『開拓使旧蔵建築関連洋書の購入と移管経緯について 開拓使旧蔵建築関連洋書に関する研究 その1』(日本建築学会計画系論文集 第573号、2003年11月)、pp.147-154。
- 4) 拙稿『開拓使旧蔵建築関連洋書と開拓使洋風建築の意匠 開拓使旧蔵建築関連洋書に関する研究 その2』(日本建築学会計画系論文集 第599号、2006年1月)、pp.173-179。
- 5) 『明治十年 長官伺書録 副 公文課』簿書1951、北海道立文書館所蔵。
- 6) Woodward, *National architect*. 1969. 開拓使旧蔵書。現在は室蘭工業大学附属図書館土木専門文庫所蔵。
- 7) 拙稿、注4) 参照。
- 8) 開拓使本庁庁舎については、越野前掲書 p.156 参照。
- 9) Hussey, *National cottage architecture*. 1874. 開拓使旧蔵書。現在は北海道大学附属図書館閉架書庫所蔵。
- 10) Cummings & Miller, *Architecture*. 1868. 開拓使旧蔵書。現在は函館市中央図書館所蔵。
- 11) 『明治十一年 取採録 営繕課』簿書2523。北海道立文書館所蔵。
- 12) 図12の表題にも示すように、この当時「雛形」には「design」や「plan」の意味があった。『英和対訳袖珍辞書』(文久2年)など、当時の英和辞典のほぼ全てにおいてこのことを確認できる。
- 13) 拙稿、注4)。
- 14) 拙稿、注4)において、パターンブックの意匠を参照して組み立てられた洋風建築を、所謂「擬洋風建築」とは区別して、越野武の言葉を借りて「初期洋風建築」と呼ぶと考察した。

[2006年10月19日原稿受理 2007年2月19日採用決定]